

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤（C）一般

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19530728

研究課題名（和文）幼児教育における保育内容の再構造化：学校教育を貫く3つの軸から

研究課題名（英文）Restructuring of educational contents in preschool education：From three axes penetrating school education

研究代表者

無藤 隆（MUTO TAKASHI）

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：40111562

研究成果の概要（和文）：

本研究では、幼稚園の一つのクラスで週に1回ないし2回、3歳から5歳までの3年間の縦断的なビデオ観察を行い、その記録を分析することを中心とした。また並行して、各々の分担者がそのフィールドで行った観察を元に検討した。幼児教育を貫く3つの軸として「協同的な学び」や自己制御、学習の芽生えを取り上げ、それらを、構成遊び、ごっこ遊び、製作活動、クラスのグループの話し合い活動等を通して、「目的を志向する傾向」が成り立つ過程として位置づけられることを見いだした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, first, we conducted a longitudinal video observation about a class once or twice a week over 3 year period from 3-year-old class to 5-year-old class to analyze the protocol as a central research. Parallely, each researcher examined the records of observation he/she did in each field. We took up 'cooperative learning', 'self-regulation', and 'emergent learning' as three axes through preschool education. Then, we found that those axes are located as processes to make possible 'goal-oriented tendency' through construction play, make-believe play, shared production activity, and class group discussion activity and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
19年度	1,400,000	420,000	1,820,000
20年度	1,000,000	300,000	1,300,000
21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：就学前教育

## 1. 研究開始当初の背景

「幼児教育における保育内容の再構造化：学校教育を貫く3つの軸から」において、協同的な学び、学びの芽生え、自己制御・抑

制などを取り上げて、幼児教育から小学校教育へと接続する際のカリキュラムの中止的柱としてとらえようとした。今日、幼児期の教育と小学校以降の教育との連携推進が課

題とされている中で、幼児期における「協同的な活動」が重視され、活動の中の子どもの経験や学びについて関心が寄せられている。「協同的な活動」とは、保育園や幼稚園の主に5歳児クラスで、保育者の援助の下、子ども同士が共通の目標を作り出し、協力しながら継続して取り組んでいく活動のことである。その構成要素や過程、保育者の支援等実態については明らかにされていない。また、そのことと、学びの芽生えや自己制御のつながりについて論じられていない。

## 2. 研究の目的

協同的な学びの実践の検討を中心に、さらに学びの芽生え、人間関係の成立とそこでの自己抑制などを検討して、幼児期の3年間の成長の流れとして位置づける。そのための中心として、「協同的な活動」を検討する事例を取り上げ、5歳児クラスでの「遊園地作り」の活動を中心に分析を行い、次に、幼稚園の3年間の事例から協同的な活動の下地となるような経験を抽出して分析を行い、実践に根ざした協同的な活動の在り方について明らかにする。また各々の研究者のフィールドにおいて、子ども同士の具体的なかかわりを、子どもの身体の動きに焦点を当て、幼児期の人間関係の成立を明らかにすること、身体を動かす遊びや運動の事例のうち、3学期のチャレンジ活動を取り上げ、幼児の学びとそれを支える保育者の援助について検討する。ここでは、学びにつながる行動を「環境に興味を持ってかかわり、試行錯誤しながら、気づいたり、工夫したり、考えたり、挑戦したりすること」と定義した。さらに、幼児期の自己主張・自己抑制の発達を、幼稚園の保育の観察から明らかにする。子どもが自分の思いを主張できるようになる過程や、自分の気持ちを調整しつつ、相手の欲求やまわりの事情に配慮するなどの様子や、保育者の関わりや指導のポイントを取り出し、自己制御の発達への展望を検討する。

## 3. 研究の方法

中心となるものとして、幼稚園において、1クラスの子どもたちが3歳児クラスに入園して卒園するまでの3年間、週に2回程ビデオ撮影を行った。それに並行して、幼稚園の3～5歳児クラスについて、年間15回程度、各研究者が主に登園時から昼食時までの午前中の保育を観察し、そこで得られた事例の分析と考察を行った。また、観察後にクラス担任と話し合いを行った。映像から、出来事のまとまりごとにエピソードとして文字化

して記録を行った。なお、幼児期の自己主張・自己抑制の発達観察では、4歳児クラスで対象児として自己主張が苦手な男児H、気持ちの調整が苦手な女児Cの2名とした。

## 4. 研究成果

(1) 「協同的な活動」を検討する事例として5歳児クラスの11月に取り組まれた遊園地作りの活動を分析した。

遊園地作りの約1カ月に渡る取り組みである。5歳児クラスの遠足で遊園地に行った翌週に、園での毎年の恒例行事である祭りの相談を5歳児クラス全体で行う。そこで祭りの内容が、「遊園地作り」に決定する。具体的なアイデアを出し合い、子どもたちは自分の作りたい出し物ごとにグループに分かれる。翌日には「設計図作り」として、子どもたちがグループごとに出し物について話し合いをしながらイメージを絵に描いて表現する。翌日からは毎日グループごとに子どもたちが決めた時間に集まり、出し物作りを始める。完成が近づくと、子どもたちが相談して、各出し物の切符、遊園地の名前などを決める。各出し物の名前はグループで相談し、それぞれ看板を描く。祭り当日には子どもたちが係の仕事を分担して、3、4歳児クラスの子どもたちと保護者を招いた。

初めに活動の「目的」の側面から事例を分析する。遊園地作りというのは当初の大きな目的であるが、子どもたちは目的に向かって整然と進んでいくのではなく、遊びを交え、目的と手段とを行きつ戻りつしながら全体の目標へと進んでいく過程が明らかになった。素材と格闘しての試行錯誤や子ども同士での教え合いが生まれた。5歳児クラスの協同的な活動では、大きな流れの中では一つの目的に向かいつつ、場面ごとには手段が目的化するような相互作用を営みながら進むことで、子どもたちがより積極的に協同へ向かうという体験が促されていた。

次に保育者は多様なかかわりのもと、子どもたちの活動への支援を行っていることが明らかになった。子どもたち自身で遊園地作りの活動を行うために、保育者は祭りに向けての全体的な進行や、出し物の作業場所や当日の配置等の大きな枠組みを定め、それを軸に子どもたちに活動を促していた。また、保育者は子どものイメージやこだわりを実現していくための環境作りを行った。加えて、協同作業の下地となる遊園地で遊んだ遠足の写真や、子どもたちが描いた出し物の「設計図」の掲示など、子どもたちが自分の経験を想起し、イメージを具体化し、互いに共有

していくための媒介となる環境作りを行った。子ども同士で話し合い、聴き合う態度を伝えることで、子どもたちの協同を媒介する役割を担っていた。安全性の確保や協同作業の場作りのためには、保育者は直接的に子どもたちの活動に介入を行うこともあった。

活動の目的と手段との相互作用性についても、保育者が役割を果たしていた。子どものアイデアや好奇心に耳を澄ませ、当初のプランに包含していく保育者の姿勢が見られた。一見全体の流れの中で目的から道を逸れていると捉えられるような行為も、保育者が活動の一部として取り入れていくことで、全体の協同体験を促していた。

協同的な活動は5歳児クラスになったからできるというものではない。園では、遊園地作りの活動が行われた5歳児クラスの11月までに、子ども達は幼稚園で仲間や保育者とともに様々な経験を重ねてきている。本研究では協同的な活動を構成する要素として、「計画性」、「役割分担」、「目的志向」、「意志決定」を提案する。次に、各要素の下地となる活動として、3年間の観察調査の中から事例を挙げて分類を行い、それぞれ要素の代表例として、構成遊び、ごっこ遊び、製作、話し合い活動の分析を行った。

計画性に焦点化した構成遊びの分析（3歳児クラス2月の積み木遊び）から、目の前に置かれた積み木の配置や、自身の体を使って物を操作するという身体の動きに伴い「合体」や「ドア」というプランが生成されていくことが明らかになった。

役割分担に焦点化した工事ごっこ遊びの分析（4歳児クラス9月の砂遊び）では、「工事ごっこ」という共通のイメージが中核となり、共に体を動かすという身体的協同性が、子ども同士での声のかけ合いや、役割分担を支えていた。

目標志向性に焦点化した製作活動の分析（5歳児クラス9月の万国旗作り）では、万国旗づくりという大きな目的のもと、子どもに自分なりの目標が立ち現われていく過程が見られた。保育者と子どもが作品についてのやり取りを行い、保育者は子どもの描画の志向性を理解し具体的な助言をしていく。子どもが描きながら次第に国旗作りという目標が生成されていき、結果的に作品が作られている。

意志決定に焦点化した話し合いの分析（5歳児クラス6月の生活グループ名の相談）では、生活グループの再編成にあたり、各グループが自分たちでグループ名を付けるために、初めに保育者が中心となって全体で「相

談」と呼ばれる話し合い活動を行い、名前のテーマを決定し、その後、各グループで名前を付ける過程を分析した。保育者は話し合いの活動を通して、子どもたちに他者との意見調整の方法という個別のスキルを教授するとともに、座る、他者の顔を見る、発言を聴くといった、穏やかで丁寧に話し合いを行うという姿勢の伝達も行っている。

(2) 身体の動きに特化した観察からは、以下のことが明らかとなった。

他者と同じ動きをすることは、子ども同士の親密性を高め、子ども同士の人間関係の成立に寄与する。

身体の動きは、表情や声に現れる情動と密接に結びついており、身体の動きが子ども達の間で繰り返されることは、情動の共有にもつながる。

身体の動きならびに情動の共有は、大勢が集まる場面（集まりの時間等）では子ども全体に広まり、集団意識の萌芽となる。

子ども同士の相互作用の「媒介物」の視点から、身体だけでなく言葉、物の同型性もまた、人間関係の成立に深くかかわっている。

相互作用の媒介物としての身体、言葉、物の特質を明らかにすることが今後の課題として見出された。

(3) 「チャレンジ活動」における分析から学びの芽生えを検討した。

5歳児3学期になると、観察園では「チャレンジ」活動が行われる。チャレンジでは、竹馬、一輪車、コマ、けん玉、縄跳びなど、抵抗感のある遊びに継続的に取り組むことが目指されている。事例から、幼児の学びにつながる行動として、繰り返し取り組む、うまくいかなくても挑戦する、うまくいかない理由を考える、工夫して試す、仲間をよく見る、コツに気づく、コツを教えてもらう、コツを教える、励ましあう、競いあう、数を数える（歩数、回数）、技を加えレベルを上げるが観察された。支えるものとして、保育者要因では、近くで見守る、励ます、認める、褒める、モデル、コツなど共有する機会を提供する（個別、全体）、安全確保が挙げられた。環境要因では、毎日の取り組みが分かる全員のチャレンジカードのボードと記録を色塗りするテーブル（下駄箱付近で外からも可能、仲間と眺めて報告し合える）、十分な遊具の数、レベルの異なる種類や技のための素材・遊具、複数から選択可能が挙げられた。

すぐにできなくてもあきらめず、目標を持って取り組み続けること自体が幼児の学び

であり、それを支えるための保育者の援助や工夫が行われていた。チャレンジに取り組みにくい幼児には、個別に声をかけ、抵抗感の少ないものから始めてそばで励まし、仲間とつないでいた。2月のお楽しみ会では、得意技を保護者の前で披露する場が用意されていた。できたときの達成感や仲間と競争する面白さ、より高度な技に挑戦する楽しさに身体を通して気づく体験は、小学校以降の生活にも活かされるものと考えられる。

(4) 幼児期の自己主張・自己抑制の発達を二人の子どもの事例から検討した。

#### 男児Hの発達的变化

Hは4歳児から新入園のため、観察を始めた6月でも、登園後しばらくは泣き、担任教諭Mのそばにいて、自分から遊び始めることができない。6月下旬に園内のホールで5歳児がお店屋さんをやり、4歳児はお客になって買い物をするお店屋さんごっこがあった。Hは、担任教諭と離れて、お店屋さんの5歳女児に教えてもらい、はじめて1人で買い物ができる。Hは担任を探して、自分で買ったものを見せる。担任が「自分で」買ったことを褒めてくれる。これが自信となり、時間終了まで、両手に抱えきれないほど、買い物をして、満面の笑みで教室に戻る。この日から後、登園後、泣く時間が短くなり、自分で泣きやみ遊べるようになった。そして1学期の終わりには、興味のあう友だちができ、一緒に遊ぶようになる。2学期以降には、主張の強いKからの無理な依頼に、Hが嫌だということを主張する場面、担任に自分が描いた絵をみんなに紹介してもらおうようアピールする場面、自分のおもちゃをほしがる友人に別のものを渡して一緒に遊ぶ場面など、適に自己主張をしたり、調整したりする場面が多く見られるようになった。

#### 女児Cの発達的变化

1学期から2学期にかけて、自分の好きなことをしているときや、自分の主張が通った時は楽しく遊べるが、友だちから注意されることなどをきっかけに言い合いになることがあり、主張が通らない場合は、落ち込んで行動が止まってしまうという場面が多く見られた。落ち込んだときは、担任や仲間が近くにいて、何度も声をかけるが、ほとんど反応せず、立ち直るまでかなり時間がかなりかかり、気持ちの切り替えができなかった。3学期になると、落ち込んだ気持ちになったときは、ゆっくりと部屋の中を歩き、落ち着ける場所を見つけてからは、自分から周りに働きかけるという場面も見られるようになって

た。

#### 結論的考察

保育者のかかわりとその役割の多様性の中で、活動の目的と手段の相互作用性が維持され、子どもの協同への主体的なかかわりが実現していることが明らかになった。それ以前の3歳児クラスからの園生活の中では、構成遊び中で目の前の物や身体の動きを通して「計画性」が生まれ伝えあいが起こる経験や、ごっこ遊びを通してイメージや場や動きの共有から「役割分担」が発生し、製作活動では、周囲の物理的環境や保育者や仲間とのやり取りを伴って描くという行為そのものを通して「目的志向」が立ち現れ、話し合いを通して集団での「意志決定」の方法や態度が伝達される事例を代表例を取り上げた。これらの日々の経験が下地となり、結果として保育者の支援のもと子どもたちが自分たちで作る協同的な活動や目的的活動、またそこでの学びへと結びついていると考えられる。

特に、協同的な活動は遊園地作りに限らず、園によっては、劇や音楽祭、協同製作等、様々な形で取り組まれていると考えられる。また、本研究で取り上げた要素以外にも、日々の園生活での多様な活動が協同的な活動の下地となっていると考えられる。遊戯や追いかけっこ、大型積み木をいっしょに運ぶ等、身体を使った遊びを通して身体的な協同性を育む経験や、鬼ごっこやドッチボールなどのルールのある遊びを通して、仲間を応援する経験や約束を守ることで得られる楽しさやルールの大切さを学び、昼食の準備や飼育当番を行う生活グループ等での活動を通して、仲間と責任感を持って継続的に活動を行うことを経験し、他者との生活での楽しさや仲間意識を育んできている。

これらは、身体的相互作用関係を元にして、自己抑制等が目的を志向する中で生まれ、次第に学びの芽生えとつながるものである。それをとりわけ促し、幼児教育の一つの達成点となるものとして「協同的な学び」の活動が位置づけられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計14件)

- ① 久田知佳・掘越紀香、幼稚園から小学校への移行期における教師の対応の変容、大分大学教育実践総合センター紀要、査読無、26巻、2010、21-38

- ② 齋藤久美子、無藤隆、幼稚園 5 歳児クラスにおける協同的な活動の分析:保育者の支援を中心に、湘北紀要、査読無、30 巻、2009、1-13
- ③ 砂上史子・秋田喜代美・箕輪潤子・安見克夫、「保育者の語りにもみる実践知—「片付け場面」の映像に対する語りの内容分析—、保育学研究、査読有、47(2)、2009、70-81
- ④ Fuminori Nakatsubo, Junko Minowa, Kiyomi Akita, Fumiko Sunagami, Katsuo Yamori, Tokie Masuda, A study of the involvement of Japanese early childhood teachers in Clean-up Time, Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education、査読有、Vol,3 No.1、2009、69-85
- ⑤ 無藤隆、社会性の発達とは—乳児から思春期まで、チャイルドヘルス、査読無、11 巻9号、2008、624-627
- ⑥ 堀越紀香、安藤智子、荒牧美佐子、丹羽さかの、岩藤裕美、無藤隆、子育て支援における幼稚園の役割:預かり保育と未就園児支援に関する園長インタビューから、大分大学教育福祉科学部研究紀要、査読無、30 巻2号、2008、143-155
- ⑦ 安藤智子・無藤隆、妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化:縦断研究による関連要因の検討、発達心理学研究、査読有、19巻3号、2008、283-293
- ⑧ 佐久間路子、金田利子、佐々加代子、小松歩、林薫、川喜田昌代、小平市における保幼小連携の課題を探る—小学校1年生担任教諭対象の調査から—子育て支援ネットワーク作りに関する研究会乳幼児子どもグループ、白梅学園大学・短期大学教育研究センター年報、査読無、13 巻、2008、66-77
- ⑨ 小保方晶子、佐久間路子、堀江まゆみ、特別支援教育における幼小連携に向けた就学前教育における実践的課題:障害のある子どもへの支援に関する保育現場ニーズ調査より、白梅学園大学・短期大学教育研究センター年報、査読無、13 巻、2008、61-65
- ⑩ 荒牧美佐子、無藤隆、育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い:未就学児を持つ母親を対象に、発達心理学研究、査読有、19 巻2号、2008、87-97
- ⑪ 岩藤裕美、無藤隆、産前・産後における夫婦の抑うつ性と親密性の因果関係—第1子出産の夫婦を対象とした縦断研究から—、家族心理学研究、査読有、21 巻2号、2007、134-145
- ⑫ 荒牧美佐子・無藤隆、幼稚園における預かり保育の利用者の特徴—育児への負担感との関連を視野に入れて—、保育学研究、査読有、45 巻2号、2007、69-77
- ⑬ 井上美智子・無藤隆、幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態、大阪大谷大学教育福祉研究、査読無、33 号、2007、1-9
- ⑭ Komaya, M. & Muto, T., Practical Research Concerning Use of the Media Literacy Educational Material, “TV Mysteries: Ukkie Goes Behind the Scenes!” for Japanese 1st Graders、Educational Technology Research、査読有、30、2007、1-13

[学会発表](計 21 件)

- ① Junko Minowa, Kiyomi Akita, Katsuo Yamori, Tokie Masuda, Fuminori Nakatsubo, Fumiko Sunagami, Perception of Quality of Care and Education in the Particular Activities: Analysis of Clean-Up Time in Japanese Preschools, 18th European Early Childhood Education Research Association Annual Conference, 2008/9/4, University of Stavanger, Norway
- ② Fuminori Nakatsubo, Fumiko Sunagami, Junko Minowa, Kiyomi Akita, Katsuo Yamori, Tokie Masuda, A Study of the Involvement Early Childhood Educators in Two Scenarios: Arguments Between Children and Clean-up Time, 18th European Early Childhood Education Research Association Annual Conference, 2008/9/4, University of Stavanger, Norway

[図書](計 20 件)

- ① 無藤隆、ミネルヴァ書房、幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える—、2009、202
- ② 砂上史子、ミネルヴァ書房、最新保育講座 ⑧ 保育内容「人間関係」森上史朗、小林紀子、渡辺英則(編)、担当部分:第2章 乳幼児期における人とのかかわりの発達(19-36)、2009、172
- ③ 砂上史子、みらい、保育内容 領域「言葉」—言葉の育ちと広がり求めて—、田喜代美、中坪史典、砂上史子(編)、担当部分:第3章 自分の体験や考え、気持ちを言葉で表現する(47-57)、2009、166
- ④ 砂上史子、ぎょうせい、平成20年改訂 幼稚園教育要領の解説 小田豊・神長美津子(編著)、担当部分: Q20「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを

- 自分の言葉で表現する」ためには、どのような指導が必要でしょうか。／Q21 言葉による伝え合いができるようになるためには、どのような指導をしたらよいでしょうか。特に、小学校入学前に配慮することはどんなことですか(82-87)、2009、220
- ⑤ 砂上史子、フレーベル館、幼児の教育 最初の観察記録から／三歳児の汽車遊びに見る、人とかかわりの育ち／三歳児のごっこ遊びにおける場づくりの援助／あの子の隣に座りたい／フタ転がし遊びでの子どもの経験(隔月連載「観察のまど 子どものにわ」108(1),(3),(7),(9),(11)、(34-35, 34-35, 30-31, 30-31)、2009、どの号も 63
  - ⑥ 無藤隆・森敏昭・池上知子・福丸由佳他 36名、ミネルヴァ書房、よくわかる心理学、2009、357
  - ⑦ 無藤隆他 19名、ミネルヴァ書房、別冊[発達]29、新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて、2009、234
  - ⑧ 無藤隆、佐久間路子他25名、学文社、心理学のポイント・シリーズ 発達心理学、2009、163
  - ⑨ 無藤隆他9名、東京大学出版会、育ちと学びの生成、2008、266
  - ⑩ 無藤隆、民秋言、フレーベル館、幼稚園教育要領 保育 所保育指針 ガイドブック、2008、127
  - ⑪ 無藤隆他8名、白梅学園大学・白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター、発達臨床と教育実践― 特別支援を志向した発達臨床のあり方、2008、79
  - ⑫ 無藤隆、PHP研究所、子どもの成長に合わせた叱り方、2008、187
  - ⑬ 無藤隆他15名、有斐閣、子育て支援の心理学、2008、314
  - ⑭ 無藤隆他33名、フレーベル館、THE 保育101の提言 vol.2、2008、231
  - ⑮ 無藤隆 編著、北大路書房、理科大好き! の子どもを育てる、2008、173
  - ⑯ 無藤隆、佐久間路子 他、ミネルヴァ書房、よくわかる乳幼児心理学、2008、204
  - ⑰ 無藤隆、新曜社、現場と学問がふれあうところ、2007、263
  - ⑱ 無藤隆 他33名、フレーベル館、THE 保育101の提言 vol.1、2007、209
  - ⑲ 無藤隆 他9名、北大路書房、保育園は子どもの宇宙だ! トイレが変われば保育も変わる―(共著)、2007、109
  - ⑳ 齋藤久美子、遊園地作りと道草、幼児の教育、106 巻 4 号、日本幼稚園協会、2007、36-43

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

無藤 隆 (MUTO TAKASHI)  
白梅学園大学・子ども学部・教授  
研究者番号：40111562

### (2) 研究分担者

佐久間 路子 (SAKUMA MICHIKO)  
白梅学園大学・子ども学部・准教授  
研究者番号：30389853

(H19→H20:連携研究者)

堀越 紀香 (HORIKOSHI NORIKA)  
大分大学・教育福祉科学部・准教授  
研究者番号：80336247

(H19→H20:連携研究者)

砂上 史子 (SUNAGAMI FUMIKO)  
千葉大学・教育学部・准教授  
研究者番号：60333704

(H19→H20:連携研究者)

### (3) 研究協力者

齋藤 久美子 (SAITO KUMIKO)  
湘北短期大学・保育学科・講師  
研究者番号：10469463

(H19→H20:連携研究者)